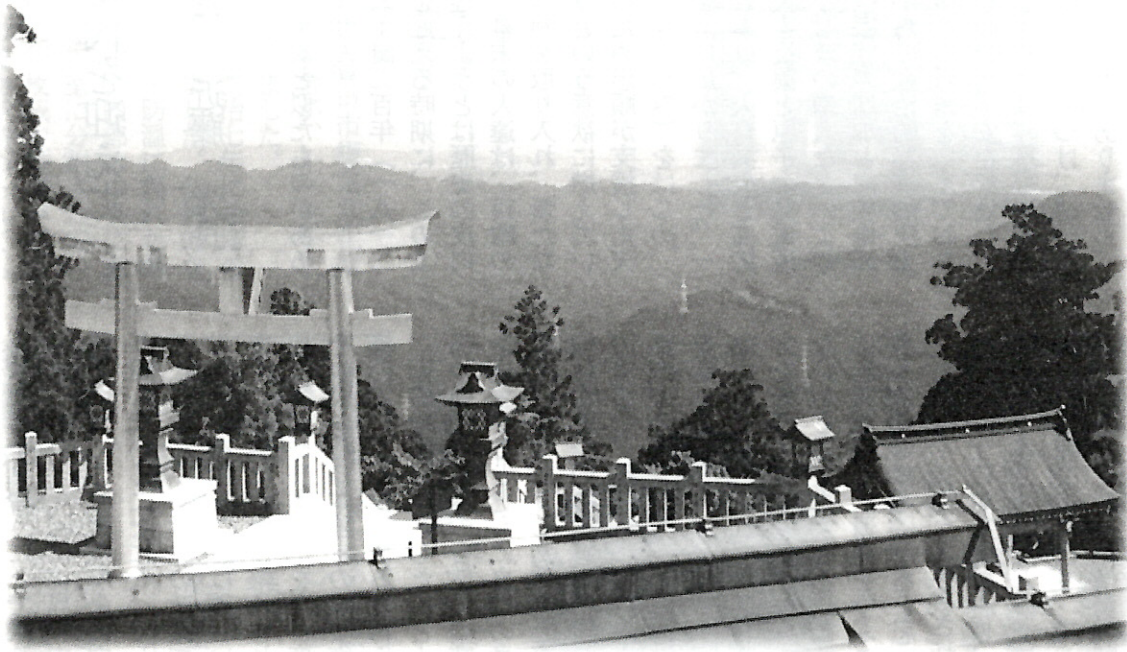


村上忠順翁顕彰会報



秋葉神社上社からの風景（撮影：酒井）

~~~~~目 次~~~~~

村上忠順翁顕彰会報 第23号

編集 村上忠順翁顕彰会事務局
発行 平成24年3月30日

	P
・忠順翁生誕二〇〇年—苦難の時代を迎えて	2
・秋葉社への旅路によせて	3
・女性部会研修会に参加して	3
・酒人神社にて	4
・村上忠順をめぐる人々	
山室山神社と忠順	4
・平成23年度の活動報告	6
・「忠順大賞」について	7

忠順翁生誕二〇〇年

―苦難の時代を迎えて



村上忠順翁顕彰会 会長 近藤 光良

待ちに待った春、まぶしいほどの

光があふれています。しかし、昨年の三月十一日は「想定外」の災害である東日本大震災が発生し日本人にとって忘れることができない日となりました。多くの尊い命と、財産が失われ、加えて原子力発電所が崩壊し、いまだに収拾ができず、この先三十年以上の歳月がかかると言われております。東北で発生した災害ではあったものの、この影響は企業や経済を通して日本全国に大きな影響を与えました。

震災は、円高による日本経済の停滞に加え、大きな社会不安となって覆いかぶさってきました。幕末に、徳川幕府の弱体化に加え、外国の黒船が開国を迫って日本に押し寄せた時の不安と混乱にどこか似たものを感じます。今日の出来事は、もしかすると村上忠順たち江戸時代末期の

人々が感じた不安と似たものがあるのかも知れません。

村上忠順翁生誕二百年（一八二二年生まれ）を迎える時期に、このような事態を迎えようとは歴史の皮肉でしょうか。幕末の人達は、西欧の文化と社会体制を取り入れ、新たな日本を創ろうという意欲に燃えていました。そのため忠順が支援した天誅組（てんちゆうぐみ）をはじめ、倒幕運動が全国に広がりました。一方、現在の日本は、人口減少と高齢化の促進、災害復興と原子力発電所の凍結、赤字財政の増大などによる経済不安、核家族の増加と家族像の崩壊、中国からの政治的経済的圧力の増大など多くの課題を抱えております。これらの社会不安を解消し、新たな発展をするには、幕末時代のように西欧諸国に追いつけ、追い越せというような見本がありません。これまで日本は明治維新、そして

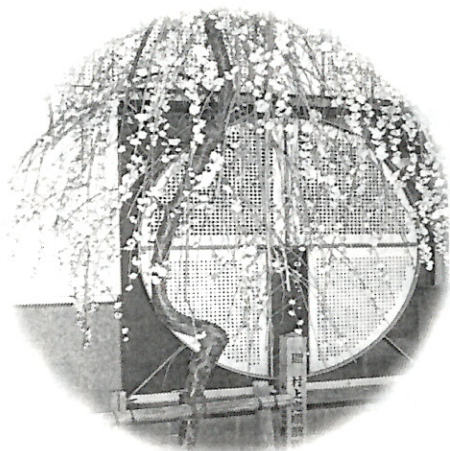
第二次大戦という大きな転換期には西欧社会を見習うことで乗り切ってきましたが、今回は世界の中でも先頭を切つてこの難題解決に向けて取り組んでいくことになってしまいました。恐らく小手先の政策では安定した社会を創ることは難しいと思います。長年にわたり継承されてきた社会制度や日本文化を今一度評価し、その中から日本独自の社会復興策を築いていく必要があると考えます。

家族をはじめとした人と人との関係の強化、日本の自然の素晴らしさを再生するとともに自然の脅威への備え、ゆつたりした時間と余白を大切に空間感覚といった日本文化の見直し、都市への集中から地域と都市との連携、海外との連携・交流を深めるとともに日本の特異性を増強するなど、これまでの日本の在り方を転換する時期に来ているのではないかと思います。このような時期に忠順が残した遺産を学ぶことは、多くの点で参考になると思います。

忠順はこれまで継承されてきた和歌という日本文化を通し、豊富な知識と、多方面の人との交流による幅広い情報交換により、楽しみながら、ゆとりを持った情勢判断を行ってきたように感じます。

少し堅い話になりました。今年も刈谷市中央図書館に寄贈した紅梅が見事な花を咲かせました。被災地の皆様にとつては明るい春を迎えることがなかなか容易ではないと思いますが、被災地の皆様のみでなく、すべての国民がもっと明るい希望に満ちた春を迎えるために、一人でも多くの人が手を取り合う時代が来たと感じます。

今年も忠順翁の業績が、より多くの皆様に伝えられるように顕彰会の活動を展開してまいります。会員の皆様の一層のご支援をお願いいたします。



刈谷市中央図書館の紅梅

秋葉社への旅路によせて

三ツ松 桂

天竜川の支流・気田川の橋を渡るとそこは秋葉神社（下社）の山麓であつた。鬱蒼とした森の奥に一筋の石段が登っている。下の河原から集められたような大きなぐり石で段組みされ、一見緩やかにも見える石段は七十段ほどでした。我々には結構厳しかったけれど全員何とか登り切り神社の境内にたどりついた。ここが本日の最終目的地である。先ずはそれぞれの願いを込めて参拝したあと社務所にて祈願のお守りをいただく。史記によれば郷土の名士村上忠順翁は江戸巡行の折、この地を訪ね参拝し又数々の名歌を詠まれているとのこと。約二百年前にこんな山奥深き秋葉路にもその足跡を残されていることにただただ感銘を受けました。

さて私は、忠順翁を偲ぶ「村上忠順翁顕彰会」の歴史探訪に初めて参加させていただきました。十月七日朝、六鹿会館を出発し、一路東名高速を東に向かい先ず二川宿本陣資料館を見学しました。係員の説明や諸々の施設調度品などの豊富さに驚

嘆しました。又県内豊橋市の一角に数百年前参勤交代の諸大名が宿場として利用した場所に今自分がいることに時を越えて親近感を覚えました。

次に訪れたのは静岡県湖西市にある豊田佐吉記念館です。佐吉翁の生家と佐吉が発明した織機の数々が展示されており、屋外は秋の草花やみかん畑などで囲まれ、広大な丘陵地は晴れた日には富士山も眺められるとのことでした。佐吉の長男喜一郎もここで生まれ後にトヨタ自動車を創設しています。今や世界のトヨタの源流ともいえる記念館でしたが時間の都合で駆け足となったことが些か心残りでした。

以上今回の歴史探訪は天気にも恵まれそれぞれ興味深く、本当に楽しい一日でした。

末筆ながら会長はじめ役員の方たちの心温まる数々のご配慮（特にほかほかの鰻弁当は最高）に感謝し御礼申し上げる次第です。



豊田佐吉記念館前にて

女性部会研修会に

参加して

小野寺喜栄子

平成二十三年七月十二日、暑い中女性部会の「江戸の粋を求めて」という研修会が行われました。参加者数三十五名、今回は忙しい中、近藤光良市議会議員も参加され、笑顔がいっぱいでした。

トヨタ自動車から、運転手さん付でバスを出していただきました。運転手さんはとても安全運転で、本当に楽しい一日でした。

まずバスの中で、今日の行程を説明されました。下見をしたり、いろいろ調べたり、役員の方には大変お世話になりました。

まず、碧南の「哲学たいけん村」無我苑につきました。お抹茶とお菓子をいただきました。案内人を先頭に苑内を見学しました。

哲学……何か難しいと考えてましたが、「哲学たいけん村」は、忙しい暮らしの中にいて、ふと立ち止まり、自分を見つめ自分を振り返ってみる、そんな「たいけん」が出来たという場所でもあります。途中に蓮の花がたくさん、見事に花開いて

いました。

次は、藤井達吉現代美術館に行きました。達吉の生涯にわたる作品の見事なことに、とても感動しました。絵の中に筆で言葉が書いてあったり、小皿の中に絵があつたり、帯の中に花文があつたり、達吉がいろんな事に挑戦して楽しんでいったんだなあと思いました。昼食は、日本料理「小伴天」でした。大変おいしくいただきました。

酒人神社に着いて、バスを降りる時は空に雲がいっぱいだったので、日傘はバスの中においていきました。見学している間に、又雲がなくなり、暑くなっていました。一緒に行った人が、神社の門の左側にある石碑の文を書いた人の名を見て、自分のおじさんであるとびっくりしていました。こんな驚きもあるんですね。神杉酒造で、酒が出来る工程を実際に中に入り、二階へ行ったりして、見学しました。神杉酒造で試飲した甘酒（ノンアルコール）が大変おいしかったので、お土産に買って帰りました。

トヨタ会館で四時十五分からロボットのトランペット演奏があると聞きました。運転手さんのおかげで少し前に着きました。電気自動車の

展示もあり、見て回っている間に、トランプ演奏が始まりました。可愛い手が驚くほど速く正確に動くので感動しました。

運転手さんありがとう。お土産屋で自動車の形のお菓子をを見つけ、買いました。

本日に今日は有意義な一日でした。特に、「哲学たいけん村」ふと立ち止まり自分を見つめ直す。忙しい中にそういう時間を作ることが大事だなあと感じます。又これからも女性部の部会には参加したいと思っています。ありがとうございました。



哲学たいけん村無我苑にて

酒人神社にて

柴田万里子

「モサクさんだー」
何だか旅先で知り合いに遭遇した様な感覚。

村上忠順翁顕彰会女性部会の研

修会に訳がわからないまま参加して、酒人神社に参拝した折、入口付近に建てられた大きな石碑

美酒発祥地 石田茂作書



これを見て驚いた。子供の頃、母から聞いていた人物だからだ。母にとつて義兄の偉業は誇らしかったのだらう。子供の私達に多くではないが幾つかの事柄を聞かせてくれた。

「ふーん。そんな人が居るんだ。」
そのくらいにしか感じていなかった。研修会に参加された人の中にも石田茂作の事を知っている方がおられた。それ事態にも驚いた。

歴史に名が残る。この碑が、この酒人神社に建っている限り、多くの方の目に留まり受け継がれる。歴史に残るとはこういうことなんだ。

母の命日も近い。墓前で報告する事が出来る。

「お母さん！茂作さんに逢った様な気分だよ。」

村上忠順をめぐる人々

山室山神社と忠順

東京都立小岩高等学校教諭
学術博士 中澤伸弘

明治八年三月二十一日に三重県松坂郊外にある山室山の本居宣長墓の脇に宣長と平田篤胤の御霊を奉斎する山室山神社が御鎮座になった。

これは野呂萬次郎、川口常文、久世安庭、岡村美啓、垣本安基衆らが官許を得て創建したものであつて、宣長に対する厚い景慕の表れであつた。この時の記録が『山室山神社遷行事録』であり、東京大学国文学研究室の本居文庫に蔵されてをり、同じ物が刈谷の村上文庫の『蓬廬雜抄』の中にある。なぜならば忠順はこの鎮座の祭儀に娘婿の深見篤慶と共に奉仕してゐるからである。(他に、豊橋図書館の羽田野敬雄旧蔵書「栄樹園雜類集」、矢野玄道の旧蔵書の愛媛県大洲矢野文庫にある。本居文庫本では「村上」を「井上」と誤記してゐるので注意が必要)

明治維新後、政府は神道を以て国家の宗祀としたのであつて、そのやうな中で宣長を神として祀る神社が山室山に出来たのであつた。明治四

年に小さな祠として祀られ、それを更に拡張し、盛大な祭儀が営まれたのであつた。それに先立つて、八年の三月十五日に地鎮祭が本居信郷を斎主、久世安庭と岡村美啓を祭員として奉仕された。本居信郷は当時の松坂の本居家の当主である。本居家は宣長のあと養子の太平が若山に移住し、その後内遠、豊頼と続く若山の家が、一方宣長の実子の春庭の後を有郷、信郷と相続したのが、松坂の本居家であつて、あの宣長の書斎鈴屋を伝へたのはこちらの家であつた。それなのに本居国学と言つた場合、若山の家系ばかりが注目されてゐた。そのやうな意味で宣長の故地松坂の本居信郷を表舞台に出したことは注目出来よう。信郷は宣長の娘で四日市の高尾家に嫁いだ飛騨の孫で春庭実子の有郷の死後、高尾家からやむなく松坂本居家を継いだのである。本居家を継いだ信郷は松坂の人々と宣長の六十一歳祭を松坂で盛大に行ひ、また紀州の本居家の世話になる「厄介」と言ふ関係を絶ち、独立するなど松坂本居家の復権を考へたやうである。この祭儀にもその意味合ひは認められよう。

発起人五人のうち、野呂萬次郎は平田の門人だが、久世安庭と岡村美

啓はともに松坂の人で、殊に安庭は文政八年に春庭の門人となつてゐて、明治二十年に八十二歳で逝いてゐる。この人のやうに松坂の門人の本居家に寄せる思ひは重要である。

鎮座祭は三月二十一日に斎行され、本居家から神御が出御、神宝などを捧持し行列を組み山室山に至り御鎮座になつた。ここでも本居信郷が斎主を勤め、久世安庭、岡村美啓らが祭員を奉仕し、忠順はじめ多くの人物が参加したのである。

忠順はどのような縁からこの祭儀に参列、奉仕することになつたのであうか。この時の忠順の松坂行の手控へに『伊勢日記』があり、また忠順の娘婿で、忠順とともに付き従つた深見篤慶のこの時の日記である『山室山詣日記』(ともに村上家蔵)がある。『伊勢日記』はこのたびの伊勢行の他に明治三年の四月の参宮のことや、路用の費用などが記載された草稿である。その一方『山室山詣日記』は記載が詳細である。以下二つの記録に拠つて当時を描いてみる。鎮座祭の案内状は、野呂萬次郎、川口常文、久世安庭、岡村美啓、垣本安基等との連名で、三河の羽田野敬雄の元にもたらされた。それは「……来ル廿一日ヲ生日乃足日ト祝定テ神

遷之儀式可成丈盛大ニ執行仕候積ニ候間 此段御報知申上候依而右老先生ニモ御参宮旁右当日ニ御参詣被成下候半バ弥以テ一同大慶ニ奉存候」といふものであつて、忠順は敬雄からこの報を受けて参加したやうである。(羽田野敬雄は所用があつて不参)

忠順は篤慶、深見篤恭、鈴木重節らとともに三月十八日に三河を發つた。忠順は旅立ちを「篤慶、篤恭、重節、三郎、やへ女同行にていせへと思ひたつ」と書きはじめてゐる。

ついで二十日に松坂の大和屋に投宿した。当日本居信郷を訪ふと、既に山室山に行つて棟上の式をしてゐるとのことと宿に戻ると、三河の神職である柴田頭光、菅沼真澄、佐藤三郎、進藤寛澄らが来てゐた。これらの人々も羽田野の案内によるものであつた。翌日に一行は本居家を出発して山室山に登つた。忠順は「松坂本居建亭が宅より供奉ス」と、そのことを一行しか書いてゐない。建亭は信郷のことである。篤慶は「神社の當造をみるにいとるはしうつくりたれば、深い感慨を抱き、「いやまひぬかづ」いたとその様子を留めてゐる。その後妙楽寺に休憩し、ここで「寄道祝」の歌を詠んでゐる。この歌はこの時の献詠歌集『山室山

神社奉納歌集』(東大本居文庫蔵)に著録されてゐる。

神遷の儀式は酉の刻から始まり、忠順は鏡を捧持した。神事は夜の八時頃に終了し、妙楽寺で直会、松坂に戻つたのは夜の十一時ころであつた。忠順はその時の感慨を「かへさ月出たり 山室の山ちはながくかなしきにおぼるにみゆる春のよの月」と歌にしたが、篤慶は「大和ヤヲ起シテヤドル頃ハ空ウス雲ニテ月イトアカシ おぬるころハ風□タリしか家の戸こぼこぼト鳴音す けふの山室山にノボリクダリタビタビニナリ テイミジウツカレタリトテ ミナミナネヤニイリテマドロム」と書いてゐる。翌日忠順一行は神宮参宮に出発し、その後二十五日に帰宅してゐる。

この祭儀に関して忠順と篤慶は自著『古事記標注』『古語拾遺標注』(両著とも深見家蔵版)と御神酒料として金一分を献上した。また御賢木料を、鈴木重節、深見恭次郎が、金一分を外山三郎、同八重女、御神酒料を菅沼真澄、柴田頭光が、金五十錢を佐藤三郎、進藤寛澄が奉納してゐて「以上三河人十名也」と書かれてゐる。この時に三河からは十人が参詣し何かしらの奉納をしてゐる

ことは注目でき、明治初年における本居国学に寄せる思ひが伺はれる。忠順は嘉永三年に紀州の内遠の門人となつてゐた。

また先にも触れたが山室山神社に対して「寄道祝」「盛花」の兼題で歌を募り、寄せられた歌を纏めたものに『山室山神社奉納歌集』がある。先掲の深見篤慶の『山室山詣日記』に「此ノタビ山室山神社官許ニナリテ三月廿一日ハ神遷ノ式執行 翌廿一日ハ寄道祝兼題ノコト三月十六日ノ日ノ新聞ニ出タル」とあり、御鎮座前に新聞で公募したことが判る。どの位期間を置いたのか、「寄道祝」の歌を出詠した者は二百四十四人、また「盛花」の歌を出詠した者は百八十人であり、この中で双方を詠んだ者は百六十五人となる。他に巻末には「山室山」「山室山に奉る歌」「卯月の末つかた山室山神社に詣でて」などと題する歌が記録されてゐる。『山室山詣日記』には忠順の長歌をはじめとして、その周辺に居た人物十七人もの宣長を称へる歌が記されてゐて、その歌はみなこの歌集に載せられてゐる。歌は各地から集められたと見え、また配列から考へると地域ごとに纏まつて詠進されたと考へられる。これらの歌人は当時それ

なりの名があつた者であり、また本居（鈴屋）派の歌人と限定される訳でもなく、明治維新後に広い範囲で宣長が古典を学ぶ学者や歌人に注目されてゐたことを示すこととなる。

忠順一行の「寄道祝」の献詠歌を次にあげておく。

神風能伊勢乃國波神柄之貴有羅斯國柄芝愛痛有良之常磐在松坂之郷爾青山者多邇雖有瑞山者幾許雖有蘆曳乃山室山波蔣枕高玖尊之其山廻嶺能當乎理邇生立有櫻乃花半最末枝波天爾艷比中都枝波京薫飛下枝波部二丹類合有秀榮能華乃光波久堅能旭爾香理中津忍能華乃盛波打日指宮人挿頭下忍能華乃咲舞波天離鄙人愛奴如此許愛痛花半乾坤爾類在米耶如是許貴人波世間邇又有咩也母萬代毛此山室乃尾乃上爾鎮里座之道速振神能古道玉梓乃御路乃古言磯城島能言葉道世々遠玖守賜祢末永久幸給年秋津彦瑞櫻根能山室能神

（神風の伊勢の國は 神からし貴くあらし 國からし愛でたくあらし 常磐なる松坂の郷に 青山はさにはあるとも 瑞山はここであるとも あしびきの山室山は こままくら高く尊し その山の嶺のたをりに生ひ立てる櫻の花は ほつ枝は天に

艶ひ 中つ枝は京に薫ひ 下枝は鄙にほへり ほつえの華の光は ひさかたの旭に香り 中つえの華の盛りは うちひさす宮人かざし 下つえの華の名まひは 天さかる鄙人愛でぬ かくばかり愛でたき花は あめつちに類ひあらめや かくばかり貴き人は 世のなかに又あらめやも萬代もこの山室の 尾の上に鎮まりまして ちはやぶる神の古道 たまほこの御路の古言 磯城島の言の葉の道 世々遠く守り賜ひね 末永く幸ひ給ひね 秋津彦瑞櫻根の山室の神）

とし月にさかえ行かも言霊のさきはふ國の神のまさみち

忠順

神ながらさかゆる道の本末をたがへぬ御世道めでたかりける

篤慶

山室の神のみかげによりてこそさかえゆくらしきしまの道

篤恭

しき嶋の道のみおやの神ばかりさかえ行こそめでたかりけれ

重節

『山室山神社奉納歌集』には他に村上忠浄、菅沼左膳、中尾浄信、中野良胤、深見登之野、ほか篤行、弘治、順三、篤志、篤永、ます子、富子、とく子、ひろ子、ゆた子と言つた深見一族の歌が載る。

この後山室山神社は明治十四年に社殿改築の計画がなされ、二十二年九月に山室山から殿町追手筋の奉行所跡地に遷座し、三十六年には県社に昇格、その後大正四年に現在の四五百森（殿町一五三三の二）に遷座、昭和六年に本居神社と改称、また平成七年には「本居宣長ノ宮」と改め、今日に至つてゐる。

平成二十三年度の

活動報告

事務局 酒井順子

○五月十五日

・アニメ「忠順物語」投影
・定例総会

・「忠順ありがとう大賞」表彰式
・堤小学校四年生全員による学芸会公演について

①その経緯について

堤小学校教頭 加藤鉦一先生
②CD投影 創作音楽劇
「郷土を愛す村上忠順」



総会の様子

○七月十二日
*女性部研修会

「江戸の粋を求めて」



酒人神社にて

参加者三十五名

・哲学たんけん村「無我苑」

・藤井達吉美術館

・日本料理「小伴天」

・酒人神社

・神杉酒造株式会社

・トヨタ会館

○九月～十二月 第一土曜日

★四方樹大学



講義風景

参加者延べ五十五名

講師 新行紀一氏

(愛知教育大学名誉教授)

テキスト

「村上忠順集 座右記」

○十月七日

★歴史探訪

「三山日記」の旅その二

秋葉社の帰路

参加者 四十二名

・二川本陣資料館
・豊田佐吉記念館
・秋葉神社下社



秋葉神社下社

○十一月二十三日

★忠順翁命日墓参

ちまきのや

千卷舎の見学

平成十九年に豊田市指定文化財に指定された千卷舎が、十一月十二日に一般公開されました。

この千卷舎は、明治七年に娘婿の深見篤慶が建立しました。伝統的な土蔵造りで、防火・防湿に優れた構造となっています。内部は中央に敷居を置いて南北二室に分割されています。壁面には一枚板の書棚が四段めぐり、多くの書物が納められても

丈夫な造りになっています。この建物の中に、書籍二万五千巻、書写六千巻を納めていた(豊田市郷土資料館の資料による)そうです。残念ながら現在、書物は置いてありません。忠順翁がここで、書物を読み、書写し、大切に保管していたことに感慨深い思いがしました。



千卷舎

忠順大賞

応募期間 十一月二十三日から

一月三十一日

応募総数 一二八五首

入賞者 十八名

選者 荒川心星先生

入賞された十八名の方とその作品を紹介します。荒川先生の講評は別紙をご覧ください。

○小学生の部

豊田市長賞

駒場小六年 杉浦静花

ふりむけば

いつもいるんだ 友達が

悲しい事も 笑顔になるよ

豊田市教育委員会賞

堤小二年 しみずもえな

きれいだね

ふじも見ている はつひので

みんなの顔も ひかりかがやく

会長賞 金賞

堤小三年 神近晏那

じいちゃんの

畑でとれた お野さいは

形悪いが あいがタツプリ

会長賞 銀賞

駒場小三年 かとうあいな

がくげいかい

せりふおぼえて がんばって

おおきなうごき ママにみせよう

会長賞 銅賞

駒場小一年 すまかのん

おとうさん

しごとがおそく さみしいよ

だからわたしが てがみをかくね

中日新聞社賞

駒場小五年 須磨侑大

お父さん

今度駅伝 出るんだね

ぼくも一緒に 練習するね

優秀賞

駒場小五年 桑島一樹

しあわせだ

きちようなたいけん 米づくり

多くの人に 感しやの一言

優秀賞

堤小二年 たなべゆい

おばあちゃん

いつもげんきに あるいてる

じょうぶになつてまたあるこうね

優秀賞

堤小二年 うのあきひと

おかあさん

まいにちごはん いいにおい

ぼくのおなかは ぐうつとへんじ

○中学・一般の部

豊田市長賞

前林中一年 岸水あみ

ありがとう

いつもかわらぬ ふるまいで

わらうみんなが こころのささえ

豊田市教育委員会賞

前林中三年 伏見ことは

三年間

かかさず歩いた 通学路

思い出忘れず 卒業します

会長賞 金賞

前林中三年 近藤涼香

そらみあげ

とおくのくもに つぶやいた

いまあやまつても おそいかな

会長賞 銀賞

前林中一年 石川真緒

きをつけて

まいあきおなじ ははからの

げんきになれる まほうのことば

会長賞 銅賞

前林中三年 野口翔太

心から

笑っていられる このクラス

いつもありがと クラスの仲間

中日新聞社賞

前林中二年 湊川理奈

くうちゅうの

ながれにのつて うごくくも

そのとなりには はれわたるそら

優秀賞

前林町 甲村サカエ

すばらしや

郷土の偉人の 生涯を

学童演じ 拍手の止まず

優秀賞

前林中二年 遠藤隆史

さいごまで

あきらめないで はしりぬく

もらったバトンを きずなと思えば

優秀賞

前林中二年 相美優香

かえりみち

なかまとかえる つうがくろ

めににじむほど きれいなゆうひ

編集後記

本年度の歴史探訪は、『三山日記』の旅その二 秋葉社の帰路として、秋葉社を訪れました。上社を訪れたいと思ひ、下見をしました。上社までの道程は、道幅がせまく時間もかかるので、残念ながら会員の皆様には、下社を訪れていただきました。下見の時に上社より撮影した写真を表紙に載せました。忠順翁の時代と比べると様変わりしていることでしょう。

また本年度は、『忠順大賞』として、短歌を募集しました。感謝の気持ちだけでなく、日常のできごとから幅広くの思いを込めた短歌がたくさん寄せられました。新しく選者をして下さったのは、俳人協会の荒川心星先生です。お忙しい中、講評をいただきありがとうございます。

この会報を発行するにあたり、ご協力いただいた皆様に心より感謝します。
(事務局 酒井)